

令和 2 年 5 月 30 日現在

機関番号：12603

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2019

課題番号：15K03034

研究課題名(和文) 共鳴する「五感」：東アフリカ牧畜民における知覚の共同性に関する人類学的研究

研究課題名(英文) Resonance of the "five senses": an anthropological study on the commonality of perception among East African pastoralists

研究代表者

河合 香史 (KAWAI, Kaori)

東京外国語大学・アジア・アフリカ言語文化研究所・教授

研究者番号：50293585

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、東アフリカ牧畜民が五感の統合作用を通じて感得した「身の周り世界」をいかなる回路によって他者と共有しているのかについて、人類学的な視点・方法から解明するものである。五感の諸機能とその統合性は人類の進化的基礎であると同時に文化・社会的構築でもある。それは同じ五感を備えた身体的他者と社会的交渉を行うための基盤となる。一方、五感を構成する個々の知覚間には、他者と知覚内容を共有する際の共同性のあり方に差異が認められる。本研究では、「五感の共鳴」という身体的・社会的現象に着目して、牧畜民が他者と共有する環境の包括的全体像を、諸知覚の共同性の成立機序とその差異性の二側面から描出することを目指した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

人類学において「人間とその周囲にある生態環境との関わりあい」には膨大な研究蓄積があり、生きる場における知覚や感覚という主題は文化人類学の領域でも注目されつつある。本研究は東アフリカ牧畜民に焦点をあてて、人類学における「生態知覚共同論」ともいべき新たな領域を切り拓き、理論的に萌芽的なものに留まっていた研究を「知覚の民族誌」から「知覚の人類学」へと深化させた。人間が自らの身をおく環境を五感のすべてで受けとめるといふ人間存在の身体的なあり方と五感の共鳴という回路による環境知覚の社会的共同性を架橋することは、世界各地で進行する環境問題への認識論的視座からの接近という実践的方向性をも示すこととなった。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is to clarify, from an anthropological point of view and method, the circuit by which Eastern African pastoralists share "the world around one" which they learned through the integration of the five senses. The perceptions made by the integrated use of the five senses are not only the evolutionary basis of mankind, but also are credited with cultural and social construction. The five senses form the basis for physical, interpersonal social negotiation with others. On the other hand, there is a difference in the method of cooperatively sharing perceptual ideas with others among the individual perceptions that constitute the five senses. Focusing on the physical and social phenomenon of "resonance of the five senses" in this study, I aimed to create a comprehensive overview of the environment shared by pastoralists with other people, from two aspects: mechanism formation of the communality of various perceptions, and the differences of these perceptions.

研究分野：人類学

キーワード：人類学的構築 生態環境(身の回り世界) 知覚 五感の共鳴 チュムス ドドス 進化的基盤 文化・社会

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様式 C-19、F-19-1、Z-19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

(1) 本研究が対象とする東アフリカ牧畜民の生態や社会、また文化に関する人類学的研究において、「人間とその周囲にある生態環境(身の周り世界)との関わりあい」というテーマにはこれまでに膨大な研究蓄積がある。ここには大きく2つの流れを認めることができる。ひとつは牧畜という生業活動の観察と計測を主軸とした生態人類学の流れであり、「人と家畜と大地(生態環境)のトライアングル」という視点から、シンプルですべてを切り詰めた牧畜民の生活世界が描かれてきた(伊谷1980など)。もうひとつは、牧畜民にとって唯一の財産であり強いアタッチメントの対象でもある家畜に対する認識体系を扱う流れであり、認識人類学における民俗分類の手法を援用しつつ、詳細を極める家畜の類別法や家畜の「個性(独自性)」の発見など、多岐にわたる成果が提出されてきた(Ohta 1987など)。

(2) これらの研究はいずれも、乾燥・半乾燥地の厳しい自然環境下で、唯一「生産的に可能な(viable)」牧畜という生業活動に直結した生活や精神を端的に描きあげたものであった。しかし、研究の対象となってきた牧畜民とても、自らの身体がおかれた空間を満たすさまざまな音、時々風のもたらす匂い、原野で口にする野生の果実の味、暑涼や乾湿などを通して、「身の周り世界」における多様な事物や事象を、全身の知覚を統合することにより捉え(五感の統合性)、さらにそうして捉えられた知覚の内容を他者と共有しつつ(知覚の共同性)生活しているのである。こうした知覚の拡がりや社会性を子細かつ客観的に呈示することなしには、牧畜民の日常生活は「個」的で家畜に特化した、無機質的な印象を与えかねない。狭い意味での生業活動や生業対象のみに関心を集中することを超え、牧畜民を含む人類がもつ豊かな「生」の全体を正しく理解する道が求められていると考えられた。

(3) 1986年以来、ケニアのチャムスやトゥルカナ、ウガンダのドドスなど、東アフリカ牧畜民を対象に人類学的調査・研究を継続してきた。一連の研究における一貫した目標は、人類が基本的に同じ身体構造と生理メカニズムを有することに立脚し、「身体」を拠り所として、人々が自己、他者、そして環境をいかに認識し、経験しているのかを解明することにあつた(河合1998;2007など)。これらの研究を進める過程で、近代以降、認識の道具としてもっとも強力に機能すると考えられてきた視覚の優位性への懐疑が次第に大きくなっていったが、「見えることの力」を認識しつつも、視覚以外の知覚に研究対象を広げる契機となつたのは、聴覚に焦点をあてた試論「チャムスの蝉しぐれ:音・環境・身体」(河合2011)を上梓したことであつた。その後、科学研究費補助金「東アフリカ牧畜民の『五感』に基づく世界知覚に関する人類学的研究」(2011-14年度)において、「五感」はそのいずれもが人々の認識と経験に直接的に関与していると捉えるべきであること、言い換えれば、五感が総動員され、統合されて、人々の経験が構成されている可能性とそのあり方について考察した。その研究を通じて、次の段階として、人類の身体に備わつた五感が決して「個」に閉じられたものではなく、広く社会的・共同的な空間に開かれていることを、「生きる場」、すなわち人々の具体的な生活の場において、生活の流れにそって調査し、その成果を理論化する必要があると考えるに至つた。

2. 研究の目的

(1) 本研究の目的は、東アフリカ牧畜民が「個」のレベルにおいて五感の統合作用を通じて感得した「身の周り世界」、すなわち環境に在るさまざまな事物や事象を、いかなる回路によって他者と共有しているのかについて、人類学的な視点・方法から解明することにあつた。五感の諸機能とその統合性は人類の自然的=進化的基礎であると同時に文化・社会的構築であり、同じ五感を備えた身体的他者と社会的交渉を行うための基盤となる。一方、五感を構成する知覚間には、他者と知覚内容を共有する際の共同性のあり方に差異があると予測された。本研究では、複数個体間に生じる「五感の共鳴」という身体的・社会的現象に着目して、牧畜民が他者と共有する環境の包括的全体像を、諸知覚の共同性の成立機序とその差異性の二側面から描出する。

(2) 本研究では、東アフリカ牧畜民研究において牧畜活動に関わる事物や事象に偏ってきた研究対象を、環境に存在する知覚対象のすべてに拡大し、それらが人々の間で共有されていく回路を捉える上で、五感の間身体的な共鳴、すなわち、人々の間で知覚の経験が共同性を獲得していく局面を主題化した。ここでは、五感の間でその共同性に差異が見られることにも留意し、脳神経科学におけるミラーニューロン研究(イアコポーニ2009など)のアイディアも援用しつつ、群居性動物の一種として集団をなして環境を生きる人間存在のあり方を明らかにすることが目指された。人類学におけるこうした研究は、カラハリ狩猟採集民研究で身体の共振性の社会的重要性を説いた今村薫の「感応」的視座(今村2010)を除けば、国内外ともにほとんど追究されていないのが現状であつた。本研究ではこの欠落を埋めるとともに、『五感』に基づく知覚世界の社会的共同性」という新たな研究領野を拓こうとした。

3. 研究の方法

(1) 当初の計画では5年間の研究期間(当初予定4年間、1年延長)のすべての年度において、ケニアの牧畜民チャムスないしウガンダの牧畜民ドドスの現地調査を実施する予定であつた。

ところが、本研究課題の開始の前年度（平成 26 年度）に実施したドドス調査の際に A 型肝炎に罹患し、入院、治療をしたものの、肝炎自体は治癒したが、その後の体調が依然回復しなかったため、本課題の全期間中、唯一、平成 28 年度にチャムス調査をおこなうにとどまった。ドドス調査も計画したが、アプローチが困難で、環境の苛酷な乾燥地での調査の実施には身体的に不安が残り、断念した。そのため、国内で知覚やその共同性に関する文献資料や、東アフリカの牧畜民や東アフリカの自然生態環境とその認知・認識等に関する文献資料および他の研究者のもつ情報の収集や、研究連絡打ち合わせに従事するとともに、本課題以前に実施したドドス調査および上記チャムス調査による一次データにもとづき試論的論攷をまとめた。

(2) 知覚は非言語的な経験を多分に含むため、言語表現を媒介にして、それを明示することが難しい。そのため、インタビューやヒアリングといった文化人類学の調査における主要な方法、つまり言説データを重点的に収集する手法には限界がある。こうした困難な条件に対し、チャムス調査では参与観察に重点をおき、個体追跡やアドリブ・サンプリングといった動物行動学の手法も採用して徹底的に人々と行動をとともにし、彼らと環境（「身の周り世界」）の経験を共有するよう努めた。アプローチがより困難な「五感の共鳴」、すなわち人々の間で知覚の経験が共同性を獲得していく局面を把握するためには、調査対象の単位は個体ではなく、「集まり」であることが望ましい。そのため、日常生活や生業活動の場のみならず、儀礼や饗宴の場など、より多くの人々が集まる場に積極的に参加し、出来事（エピソード）の一部始終を詳細に観察した。とりわけ知覚に関連する発話や行為のすべてを、録音機器も援用しながら克明に記録し、知覚が共有化される「了解」の過程を辿るようにした。

(3) 「個」的な知覚経験が他者と共有されていく機序について、身体経験と言語的表象／非言語的表象（身振り、表情、身体の位置、身体接触など）の結節点に着目して事例を収集し、共同性が獲得されていくインタラクティブな過程を分析した。知覚によって得られた情報を人々が相互にやりとりする日常会話を非言語的表象と併せて収集した。これにより知覚情報の流れの方向性や頻度や量を分析し、個体の知覚が集団内で共同性を獲得していく過程を追究し、性や年齢などによる個体差がこれに果たす役割を確定した。

4. 研究成果

(1) **環境の知覚の生活世界における社会的共同性**：五感によって感知されるすべてを対象とする知覚世界の社会的共同性にとって、知覚された「内容」を同じ環境とともに生きる他者と共有する方法がいかなるものであるのかを明らかにするため、環境の知覚が人びとの間でどのように共同性をもっているのかに着目した。同じ環境に生きる他者、具体的には家族や仲間や隣人といった同じ生活の現場とともに生きる相手とのあいだで、個々人によって知覚された内容が共有されるためには、人間が基本的に同じ身体構造をもち、その機能も互いに似通ったものであること、それ故に、人間は基本的に同じ知覚機能をもつ（と信じられている）との認識が、意識的であれ無意識であれ、重要である。人びとは同じ五感という知覚機能を備えた身体的他者と互いに社会的交渉をしながら、ともに生きている（共存している）。このことから、五感による環境の知覚の社会的共同性は、まずは日常的な生活世界、とりわけ社会生活のありようと分かちがたく関連していることが明らかになった。

(2) **「身の回り世界」の共有**：(1) で述べた「環境」とは、ユクスキュルのいうウンヴェルト *Umwelt*（ユクスキュル・クリサート 1973）をあてるのがよい。一般に「環世界」と訳されることの多いユクスキュルのウンヴェルトは、生物がそれぞれに備えている、生物種ごとに異なる感覚器官によって「身の回り」のさまざまなものを知覚することを通して、それぞれに異なった世界としてとらえられるような、そしてその中で当該生物がさまざまに行動するような、そうした意味のある環境のことであり、これを「身の回り世界」と呼ぶことが許されよう。人びとは言説的、非言説的な諸活動を通して、きめ細やかに「身の回り世界」を経験していると考えられるが、そうした「身の回り世界」の経験が、人びとがともにいるその現場、つまり同じ地域、同じ環境に「ともに生きる」人びとのあいだで共有されている可能性について、以下が明らかになった。すなわち、①同じ場所において、同じものたちに囲まれ、少しずつずれたり重なったりしながらも基本的には同じような感覚を同じ五感の能力によって感じ取ることになる、②そうした経験が、人びとが「他者とともに生きる」ことの基盤となり、また「他者とともに生きる」（＝共存する）ことの実感をもたらすのである。

(3) **失敗事例にも着目する**：調査では仮説検証のため、知覚の共同性の発現の「失敗」局面をもつ事例に特段の注意を払い、事例を集めた。これは共同性を共同性として正面から取りあげることが実証論理として難しく、むしろその失敗事例のなかにこそ共同性のありようが具体的に浮かび上がってくると想定されたからである。(2) で述べた「身の回り世界」で同じ環境に身を置いているからといっても、人びとがまったく同じ知覚経験をしているとは言い切れない。知覚の内容や強度には個人差もあるだろう。したがって、知覚の共有、共鳴に失敗する事例も出て

くる。ある人が知覚した内容に関する「つぶやき」や「同意を求める発話」に対して、周囲の人びとがそれを無視したり、非同意的な（反対）意見を発したりすることは現実の生活世界においてしばしば起こる。こうした知覚の共鳴の「失敗事例」もまた、注意深くデータとして採取して、性や年齢、その場、その環境への接近の度合いの違い、つまり発話者と周囲の人びととのさまざまな属性の差異を見極めることで、知覚内容の個体差が齟齬を生じさせていたことが明らかになった。ただし、すべてを個人の属性に還元してしまうことについては注意も必要である。ひとはそれほど揺るぎない自信を持って自己の知覚を経験しているわけではない。その場のやりとりをコミュニケーションの流れとしてとらえ、人びとがさまざまなやりとりをするなかで、知覚の共鳴が発動し、ずれたり重なったりしながら、やがて人びとの間で知覚の共同が達成されゆく過程を見ることができるところである。

(4) 知覚内容の共同性のあり方における差異：五感を構成する個々の知覚間には、他者と知覚内容を共有する際の、共同性のあり方に差異があることも明らかになった。視覚や聴覚にとって刺激となる対象は一般に身体の外に存在するため、より客観的で誰にも同じように知覚されやすいという意味で共同性が高い。他方、味覚は身体内部で知覚されるため、より主観的な状態にとどまりがちで、誰もが同じように知覚しているか否かの確信が得られにくい、という意味で共同性が低い。だが、味覚に関しては、この通例に反し、思いほか共同性が高い場合のあることを示す事例が観察された。たとえば、「苦み」の検知・認知はほかの味覚の程度よりも高く、また人びとの間の差があまり出てこなかった。つまり、どのような味を苦いと感じるのかについて、同じような環境に同じような生活様態でともに生きる共同体の人びとの間に高い相関が認められたのである。こうした差異の発生機序についての考察は今後の課題である。

(5) 知覚の共同性を扱う方法論——生態的参与観察の採用

「知覚はそうそう語られない」という事態に対し、五感の社会的共同性（五感の共鳴）に接近するために、以下の方法論の採用を検討した。まず、人類学における現地調査のひとつの方法である参与観察を積極的に採用することである。とにもかくにも徹底的に人びとと行動をともにする。人びとと同じ環境に身を置き、身の回り世界を共有することから始めるのである。言説的なデータももちろん採取する。つぶやき、語りかけ、同意を求める発話、人びと同士の会話などのことだ。そしてその時の環境条件を、その時の人びとの経験として、調査者自身も共有する。客観的なデータとして気温、湿度、風力、音量等が計ればよりよいだろうが、最低限、調査者自身の知覚の経験を、できる限り客観的な表現で記述する。この「徹底的に人びとと行動をともにする」という方法は、霊長類学者の黒田末壽が霊長類学の方法論として提唱している「生態的参与観察」（黒田 2002：84-86）とほぼ同じである。黒田はこの方法について、以下のように説明する。「サルについて歩き、サルと同じように行動する。つまり、サルと同じように動き、食べ、休む」。これは、サルが生き物として利用している環境を、同じやり方でわれわれが利用することを意味する。サルの生活をなぞり、活動を同調させることにより、その社会生活を擬似的に経験することができる、黒田は記している。ただし、感情や心が重なるかどうか、感情的に共感されるかどうかは要請されていないともいう。参与観察は、行為や経験に焦点を当て、これを同調させる、ということをしているのだが、観察者が自らサルと同じ環境で行為し経験することで「分かる」ことがあるという。同じ環境に身を置き、同じ環境との相互作用の働きの中でともに生きることにより、「意図せずに現れるかすかな一致の感覚がもたらされる」（傍点筆者）のである。こうした感性を信じて、この方法を徹底することが肝要であるとの結論にいたった。

(6) 共感とミラーニューロン：これまでの成果は特定の民族集団（チャムス、ドドス）を念頭に置いたものであった。最後に、五感の社会的共同性（五感の共鳴）が人間に普遍的である可能性を、ミラーニューロン研究の成果を援用して考察した。ミラーニューロン研究とは、脳神経科学／神経生理学の分野における細胞レベルでの「共感」に関わる発見であり、マカク属のサル（ブタオザル）を研究対象とした実験で特殊な働きが発見された研究のことである（リゾラッティ・シニガリア 2009、イアコポーニ 2009 など）。ミラーニューロンと名付けられた一群の脳細胞は、他者の行動を「知覚」するだけで、発火する。例えば、サルが食べ物を食べるためにつかんでいたときに活発に放電する一群の細胞は、人間の実験者が食べ物を食べるためにつかんでいるところをサルが観察（目撃）したときにも、やはり活発に放電する。ミラーニューロンは、他者の心理状態の理解に関わる重要な神経機構をもたらしており、私たちに他人の意図を理解させる。こうした実験結果がヒトと系統的に近い大型類人猿ではなく、進化的にはより古い時代に分岐したマカク属のサルで認められたということ、それは、「共感」が進化的にずっと古い時代からわれわれ人類に備わっていた能力であることを示している。「共感」の進化的基盤は考えられて

いた以上に溯ることができたのである。人間はさまざまな差異を抱えつつも、基本的には同じ身体構造と生理機能をそなえ、似たような知覚機能を持った存在である。知覚に基づく細胞レベルでの「共感」の能力が一生物種としてのヒト（ホモ・サピエンス）に共有されている以上、五感の社会的共同性（五感の共鳴）もまた個別の文化社会的な次元を超え、人間に普遍的な現象であるとの結論に至った。

(7)「共感」の能力と社会性の進化：「共感」という回路の基盤としての感性は、五感に基づく認知機構を前提としている。したがってその解明のために知覚に着目することは、あながち的外れなことではない。今後は、(6)のように「共感」をとらえることによって、「共感」と社会性の進化との関係を考えたい。「社会性」とは、他者と同所的にともに生きる（＝共存する）ことの方途であるが、「共感」はその心的中核に位置づけられよう。「共感」の可能性を分子レベルで具備していることを前提とするなら、人類が霊長類という群居性動物に属する一生物種であるという進化的な基礎を根拠に、集団（群れ）をなして、他者と共存し、他者ととともに「環境」を生きる人間存在のあり方を、人類の「社会性」の進化の文脈から考えることが可能になると考えられるからである。

【文献】

- イアコポーニ、M. (2009) 『ミラーニューロンの発見：「物まね細胞」が明かす驚きの脳科学』 早川書房。
- 伊谷純一郎 (1980) 『トゥルカナの自然誌：呵責なき人びと』 雄山閣。
- 今村薫 (2010) 『砂漠に生きる女たち：カラハリ狩猟採集民の日常と儀礼』 どうぶつ社。
- 河合香吏 (2011) 「チャムスの蟬時雨：音・環境・身体」 床呂郁哉・河合香吏 (編) 『ものの人類学』 京都大学学術出版会、343-362 頁。
- 河合香吏 (2007) 「ドドスにおける外界認識と行為の現場」 河合香吏編 『生きる場の人類学』 京都大学学術出版会、85-117 頁。
- 河合香吏 (1998) 『野の医療：牧畜民チャムスの身体世界』 東京大学出版会。
- 黒田末壽 (2002) 『自然学の未来：自然への共感 (シリーズ「現代の地殻変動」を読む-5)』 弘文堂。
- ユクスキュル、J. J. B. ・クリサート、G. (1973) 『生物から見た世界』 (日高敏隆・羽田節子訳) 思索社 (岩波文庫版、2005 年)。
- リゾラッティ、J. ・シニガリア、C. (2009) 『ミラーニューロン』 紀伊國屋書店。
- Ohta, I., (1987) Livestock Individual Identification among the Turkana. *African Study Monographs* 8(1).

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計14件（うち査読付論文 6件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 河合香史	4. 巻 -
2. 論文標題 野（フィールド）から紙（ペーパー）へ：生態人類学のドキュメンテーション	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 科学と文化をつなぐ：アナロジーという思考方法	6. 最初と最後の頁 194 - 211
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 河合香史	4. 巻 1
2. 論文標題 五感によって把握される「もの」 知覚と環境をめぐる人類学的方法試論	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 もの人類学 2	6. 最初と最後の頁 237 - 250
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 床呂郁哉・河合香史	4. 巻 1
2. 論文標題 新たな「もの」の人類額のための序章 脱人間中心主義の可能性と課題	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 もの人類学 2	6. 最初と最後の頁 1 - 25
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 河合香史	4. 巻 1
2. 論文標題 牧畜民の遊動再考—東アフリカ・ドスの「極限」への対処めぐって	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 極限—人類社会の進化	6. 最初と最後の頁 243 - 265
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 河合香史	4. 巻 1
2. 論文標題 生存・環境・極限－人類社会の進化史的基盤を求めて	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 極限－人類社会の進化	6. 最初と最後の頁 1 - 20
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 河合香史	4. 巻 なし
2. 論文標題 敵と友のはざままで：ドドスと隣接民族トゥルカナとの関係	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 遊牧の思想：人類学がみる激動のアフリカ	6. 最初と最後の頁 197-214
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 KAWAI, Kaori	4. 巻 なし
2. 論文標題 Introduction ; Finding "Others" from an Evolutionary Perspective: The Search for the Evolutionary Historical Foundations of Human Sociality	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Others: The Evolution of Human Sociality	6. 最初と最後の頁 1-21
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 KAWAI, Kaori	4. 巻 なし
2. 論文標題 The Origins of "Consideration for One's Enemy": What Kind of Others Are Neighboring Groups to the Dodoth?	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Others: The Evolution of Human Sociality	6. 最初と最後の頁 217-233
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Ikuya TOKORO & KAWAI, Kaori	4. 巻 -
2. 論文標題 Introduction: Why the Anthropology of Mono (Things)?	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 An Anthropology of Things	6. 最初と最後の頁 18 - 34
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 KAWAI, Kaori	4. 巻 -
2. 論文標題 The Cicadas Drizzle of the Chamus	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 An Anthropology of Things	6. 最初と最後の頁 258 - 271
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 KAWAI, Kaori	4. 巻 -
2. 論文標題 Introduction - From "Groups" to "institutions": In pursuit of an Evolutionary foundation for Human Society and sociality	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 Institutions: The Evolution of Human Sociality	6. 最初と最後の頁 1-14
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 KAWAI, Kaori	4. 巻 -
2. 論文標題 Institutionalized Cattle Raiding: Its Formalization and Value Creation mangiest the Pastoral Dodoth	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 Institutions: The Evolution of Human Sociality	6. 最初と最後の頁 219-238
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 河合香史	4. 巻 Vol.32 No.2
2. 論文標題 人類を含む霊長類の重層社会の形成をめぐって	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 霊長類研究	6. 最初と最後の頁 87-91
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) https://doi.org/10.2354/psj.32.017	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 河合香史	4. 巻 Vol.31 No.2
2. 論文標題 サル屋とヒト屋の共同研究とは？「人類社会の進化史的基盤研究」の試み	5. 発行年 2015年
3. 雑誌名 霊長類研究	6. 最初と最後の頁 157-158
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) https://www.jstage.jst.go.jp/article/psj/31/2/31_31.019/_pdf	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 3件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 河合香史
2. 発表標題 牧畜民の遊動と集団間関係
3. 学会等名 第48回ホミニゼーション研究会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 河合香史
2. 発表標題 (自由集会6) 人類を含む霊長類の重層社会の形成をめぐって (趣旨と概要)
3. 学会等名 第32回日本霊長類学会大会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 河合香史
2. 発表標題 サル屋とヒト屋の共同研究とは？「人類社会の進化史的基盤研究」の試み
3. 学会等名 日本霊長類学会
4. 発表年 2015年

1. 発表者名 河合香史
2. 発表標題 ともに生きるー共同研究「人類社会の進化史的基盤研究」の試みから
3. 学会等名 人類学関連学会協議会・日本民俗学会（招待講演）
4. 発表年 2015年

1. 発表者名 河合香史
2. 発表標題 広義の人類学から多角的にヒトの進化を考えるー生態人類学
3. 学会等名 人類学若手の会（招待講演）
4. 発表年 2016年

〔図書〕 計7件

1. 著者名 河合 香史（編著）、他、全21名	4. 発行年 2020年
2. 出版社 京都大学学術出版会	5. 総ページ数 586
3. 書名 極限：人類社会の進化	

1. 著者名 床呂 郁哉・河合 香史（共編著）、他、全13名	4. 発行年 2019年
2. 出版社 京都大学学術出版会	5. 総ページ数 299
3. 書名 ものの人類学 2	

1. 著者名 KAWAI, Kaori (ed.), 19 contributors	4. 発行年 2019年
2. 出版社 Kyoto University Press and Trans Pacific Press	5. 総ページ数 506
3. 書名 Others: The Evolution of Human Sociality	

1. 著者名 Ikuya TOKORO & KAWAI, Kaori (eds.), 21 contributors	4. 発行年 2018年
2. 出版社 Kyoto University Press & Trans Pacific Press	5. 総ページ数 406
3. 書名 An Anthropology of Things	

1. 著者名 KAWAI, Kaori (ed.), 18 contributors	4. 発行年 2017年
2. 出版社 Kyoto University Press & Trans Pacific Press	5. 総ページ数 461
3. 書名 Institutions: The Evolution of Human Sociality	

1. 著者名 河合香史（編著）、他、全19名	4. 発行年 2016年
2. 出版社 京都大学学術出版会	5. 総ページ数 454
3. 書名 他者：人類社会の進化	

1. 著者名 春日直樹（編著）、河合香史、他、全17名	4. 発行年 2016年
2. 出版社 東京大学出版会	5. 総ページ数 337
3. 書名 科学と文化をつなぐ：アナロジーという思考様式	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織		
氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考